

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿 + 源氏解読

連載第 58 回 第 11.3.3.2 節～第 11.4.4 節

2020 年 5 月 15 日

小 田 勝

前回の補遺稿であげた、「準体言+になる (=…コトになる)」の例を追加する。

- ・[兼家ト] 心のどかに暮らす日、はかなきこと言ひ言ひの果てに、我も人も悪しう言ひなりて、[兼家ハ] うち怨じて出づるになりぬ。(蜻蛉)

353 頁「11.3.3.2 なくに」からである。最初の◆の類例、

- ・誰と知るべきにもあらなくに、我ひとり苦しうかたはらいたし。(蜻蛉)
- ・[故大君以外ノ] 誰によりてかくすずろにまどひ歩くものにもあらなくにと、[薫ハ] 思ひ続け給ひて (源・東屋)

2つ目の◆の類例をあげる。

- ・我が背子が使ひを待つと笠も着ず出でつつそ見し雨の降らくに (万 2681)
- ・長き夜をひとりや寝むと君が言へば過ぎにし人の思ほゆらくに (古今 463)
- ・それをだに思ふこととて我がやどを見きとな言ひそ人の聞かくに (古今 811)

同頁「11.3.3.3 ク語法の違例」でも、類例をあげる。

- ・請ふらくは、追してこれを験はさしめよ。(今昔 9-34)
- ・母嘆くらく、男も他国にて帰らず、一人の子も捨てて行きなば、我いかんせんと嘆きしかども (日蓮消息・千日尼御返事)

354 頁「11.3.4 準体助詞」。用例(1)～(7)の類例をあげる。

- ・「誰が [手紙] ぞ」とのたまふ。「まるで笛習はし給ふ人のなり」と言ふ。(うつほ・藤原の君)
- ・四月の御灌仏に、承香殿の女御の御布施は松の作り枝につけ、藤壺の女御のは藤の作り枝につけて、もてまゐれる中に (大式高遠集・詞書)

「この」は現代語では 1 語の連体詞であるが、古典語の「この」は指示語「こ」に助詞「の」がついた 2 語であるから、「この」の「の」が準体助詞であることもある。

- ・立てたるものの (=立テマワシテアル物デ)、この (=アノ故大納言ノ物) なめりと見るもの、…いとつきづきしも、あはれとのみ見ゆ。(蜻蛉)

なお、355 頁の用例(16)は、本文（国書刊行会叢書本）が信じがたいので、撤回、削除する。

356 頁「11.4.1 ども」。類例をあげる。

- ・もろともに身を捨てむも惜しかるまじき 年齢ども になりたるを（＝年齢ニソレゾレ ナッテイルノダカラ）（源・若菜下）

上代には次のような語形があった。

- ・ 娘子がとも [処女之友]（＝少女タチ）はともしろき（＝羨マシイ）かも（万 53）

用例(6)の出典は、初刷・第2刷で「(若菜下)」とあるが、第3刷で「(源・若菜下)」に修正した。

357 頁「11.4.2 たち・ばら・ら」。次例は、朧月夜と遭遇した源氏の心内で、「この人は女御の御妹たちの中の誰かだろう」の意である。

- ・をかしかりつる人のさまかな。[コノ人ハ] 女御の御妹 たちにこそはあらめ。まだ世に馴れぬは五六の君ならんかし。（源・花宴）

用例(3)～(5)の類例をあげる。

- ・「小家の門のしりくべ縄の鱈の頭、終ら、いかにぞ」とぞ言ひあへなる。（土佐）  
「11.4.3 複数表示の重出」の 358 頁、用例(7)の類例をあげる。

- ・この 人々 ども帰るまで、斎ひ をして我はをらむ。（竹取）

同頁「11.4.4 複数名詞」。「上達部」はこの形で常に複数であるから、「上達部」の後には複数を表す接尾辞は付かない。

- ・親王たち 上達部 参りつかうまつりて（続後撰 1347 詞書）

「どち」は「仲間」「者どうし」の意の名詞である。

- ・見渡せば松のうれごとにしむ鶴は [松ヲ] 千代の どち（＝千年モ変ワラヌ友達）とぞ思ふべらなる（土佐）

- ・君が家に植ゑたる萩の初花を折りてかざさな旅別る どち [度知]（万 4252）

- ・思ふ どち 春の山辺にうちむれてそこともいはぬ旅寝してしか（古今 126）

「どち」はまた、同類の意、

- ・男 どち は、心やりにやあらむ、漢詩などいふべし。（土佐）

一対の者が相互に同じ関係をもつ意を表す接尾辞としても、用いられる。

- ・おぼろけの契りの深き人 どち や 羽 を並ぶる身とはなるらむ（大弐高遠集）〈詞書「在天願作比翼鳥」〉

\*\*\*\*\*

### 源氏物語（湖月抄） 解説 桐壺（3）

（増註版 5 頁、  
新全集 18 頁）両親が揃って、当面世間の評判が華やかな御方々<sup>①</sup>にも劣らないく  
らい<sup>②</sup>、どのような儀式（の準備）をも取りまかないなさったけれど、格別、  
しっかりした後ろ盾がないので、重大な儀式である<sup>③</sup>場合には、やはり頼り  
所がなく心細い様子である。前世でも、御宿縁が深かったのだろうか、この  
世にないくらい<sup>④</sup>美しい玉のような男御子までも、お生まれになった。（帝  
は）まだかまだかと待ち遠しくお思いになって、急いで参内させて御覧にな  
ると、めったにないほど美しい若宮のご容貌である。第一皇子は、右大臣の  
娘である女御がお生みになった方で<sup>⑤</sup>、後見がしっかりしていて、疑いなく  
皇太子になるお方だと、世間で大切にお扱い申し上げているけれど、この若  
宮の照り輝くようなお美しさには、並ぶことがおできになりそうにもなかつ  
たので、（第一皇子は）一通り大切なお方だとお思いになって<sup>⑥</sup>、この若宮  
を、秘蔵の子としてお思いになり、かわいがりなさること<sup>⑦</sup>この上もない。

（注）①「世の覚え華やかなる御方々＝世に華やかなりと思はるる御方々」 ②原  
文「劣らず」。程度を表す連用修飾。新全集のように「いたう劣らず」なら「そ  
れほど劣らないくらい」 ③原文「こととある時は」。新全集のように「事ある  
時は」なら「重大な儀式が行われる時には」 ④原文「世になく」。ここも程度  
を表す連用修飾。「枝もなく（＝枝モ無イヨウニ見エルクライ）咲き重なれる花の色に  
梢も重き春の曙」（風雅集） ⑤「右大臣の〔娘デアル〕女御の御腹にて」と読む。  
⑥原文「やむごとなき」は判断内容を表す連体修飾（『総覧』323 頁）。「おほか  
たのやむごとなき御思ひにて＝おほかたやむごとなき方なりと思ひ給ひて」 ⑦  
「私物に思ほし、かしづき給ふ」と読む。

(この若宮の母君〔=桐壺更衣〕は) 入内の初めから、普通一般の帝のお側勤めをなさらなければならない軽い身分ではなかった<sup>⑧</sup>。人々の評判がとても高く<sup>⑨</sup>、高貴な人らしい風格であるけれど、(帝が) むやみにお側近くに引きつけてお置きになるあまりに<sup>⑩</sup>、(例えば) しかるべき管弦の御遊びの折々、何ごとにつけても趣のある催しのたびごとには<sup>⑪</sup>、まっ先に参上させなさるとか<sup>⑫</sup>、またある時には寝過ぎしなさせて<sup>⑬</sup>、そのまま伺候させなさるなど、むやみに、お側を離さずお扱いなさったので、自然と軽い(上宮仕えのような) 身分であるようにも見えたのだが、この御子が生まれなさせてからは、(帝は) たいそう格別に心を配ってお扱いなさったので、皇太子にも、悪くすると<sup>⑭</sup>、この御子がお立ちになるはずであるようにみえると、第一皇子の母女御<sup>⑮</sup>は疑っていらっしゃる<sup>⑯</sup>。(この女御〔=弘徽殿女御〕は) 誰よりも先に入内なさせて、重々しい方だとの帝のお思いは並一通りでなく<sup>⑰</sup>、

(注) ⑧原文「…際にはあらざりき。」この「き」は何だろう。前に「同じほど、それより下臈の更衣たちは」と書かれたことを受けるのか。 ⑨「覚えいとやむごとなく=いとやむごとなしと思はれ」 ⑩原文「わりなくまつはさせ給ふあまりに」は「おのづから軽きかたにも見えしを」に係る。 ⑪原文「…折々、…節々」は「折節」の一種の互文表現。「蟻の如くに集まりて、東西に急ぎ、南北に走る。」(徒然 74) ⑫原文「まづまうのぼらせ給ふ、」は終止形による句の並立(『総覧』498頁)。「まうのぼる」は『総覧』586頁。 ⑬「大殿籠り過ぐして=寝過ぎし給ひて」 ⑭「ようせずは=悪しくせば」。「上手く行動しないと」の意にもとれるが、「ようせずは、[玉鬘ハ源氏ノ] 実の御子にもあらじかし。」(常夏)のように、成語として「もしかすると」の意にも解される。 ⑮「一の皇子の[母デアル] 女御」 ⑯「思し疑へり=疑ひ給へり」 ⑰「やむごとなき御思ひなべてならず=やむごとなき方なりとなべてならず思ひ給ひて」